

編集後記

*本誌のアーサー王特集は、これまでに第三号、第十一号と回を重ねてきたが、私の在職最後の年度にあたってここに第三回を実現できたことはまことにありがたく、所員・委員の皆さん、および執筆者諸氏に心からお礼申し上げます。六世紀頃にブリトン人の軍事的指導者として実在した(らしい)アーサーは、さらに中世を舞台とした伝説の王、物語文学の王者として多くのテクストに語られ、その流れは近・現代の音楽、映画、演劇、絵画、そして文学の諸ジャンルに、英独仏をはじめ、多くの言語世界に作品を生み出してきた。このような《アーサー王》の主題に対応して当然なされてしかるべき実際の特集号を、三度提出できたことにより、本誌はささやかながら斯界に寄与できたかと思う。

執筆者を簡単にご紹介すると、横山安

由美氏はフェリス女学院大学、嶋崎陽一氏は龍谷大学でそれぞれ教鞭をとっておられ、前回に引き続いての参加。不破有理氏は慶應義塾大学教授。小路邦子氏は本学英文学科他の兼任講師。小沼義雄氏は本学仏文学科出身で現在ストラスブール大学で博士論文準備中。天沢は本年三月をもって本学教授を退職する。

(天沢退二郎)

*翻訳の作業を実際行っているものの間では、理論的な考察を述べることに對して強いためらいをもつ傾向があるが、去年は様々な場で翻訳者が自分の仕事について発表する機会が多かったような気がする。本大学でも、二〇〇三年十二月に、言語文化研究所招待講座の枠でパリ第七大学日本文学学科のセシル坂井教授に來日していただき、講演会を開いた。近年の翻訳論の成果や社会学的方法論を駆使して、日本文学の仏訳がどのように受理されてきたか、明晰な分析を繰り広げ、数々の問題提起を提示してくださった。

その後、参加されていた翻訳に携わる大勢の方々からの発言もあり、翻訳を対象にする研究の可能性と多様性を改めて実感する出来事となり、その記録を本号で紹介するとともに翻訳をめぐる特集を組む運びとなった。講演の際、再訳はひとつの重要なテーマとして取り上げられていたのだが、研究所前所長の芸術学科教授四方田犬彦氏から、『朝鮮詩集』の再訳をめぐる、その議論を深める原稿が寄せられた。英文学科の富山英俊教授からは、エズラ・パウンドの邦訳を題材に、詩における多言語性の翻訳についての考察をまとめた論文が提出され、フランス文学科の工藤進教授は、リモージュ大学で在学する若手の研究者カリーヌ・ガローの翻訳における言述の問題について書かれた文を訳して紹介した。さらに、これまであまり研究の対象にされてこなかった映画の字幕をめぐる、映像美学とイデオロギー批判を駆使した論文がミシガン大学映画テレビ学科／アジア言語文学科に所属する阿部・マーク・ノーネス

教授から寄せられ、本校大学院博士課程で日本映画史を専攻している山本直樹氏が翻訳を担当した。そして、私自身、翻訳論における字犠牲と精神分析理論が規定するレトルの次元を結びつけることを試みた論文を執筆した。今後も本誌が翻訳をめぐる多様な考察の場になることを願う。

(ジャック・レヴィ)

* 『言語文化』第二十二号をお届けする。二つの充実した特集を組むことができたのは、ひとえに多くの執筆者の方々、および編集に尽力していただいた方々のおかげであり、新米の所長としてはただお礼を申し上げるばかりである。

特集外で原稿をいただいた野津寛氏は、信州大学人文学部比較言語文化専攻コース助教教授。長年にわたって当研究所の読書会の講師としてお世話になってきたが、

今年度からは新しい試みとして「ウエブによるホメーロス輪読会」の講師をお願いしている。

ここで本誌の母体である言語文化研究所の二〇〇四年度のおもな活動についてごく簡単に報告しておこう。七月には宮沢賢治の翻訳者である周龍梅氏をお招きして「賢治童話の中国語訳をめぐる」の講演会、また十一月には、フランスの新進気鋭の演出家・舞台美術家ダニエル・ジャントー氏による「イメージの不在としての演劇——『視』の詩学」、および漢陽大学映画学部教授鄭用琢氏による「東洋の身体・言語・映像」という二つの講演会が催された。十二月にはドキュメンタリー映画監督の土本典昭氏による『ドキュメント 路上』の上映と講演、そして一月には第四回ポエトリー・リーディングが開催された。日常的な活動と

しては、現在九つの読書会が継続的におこなわれている。

ところで当研究所は、明治学院大学全体の機構改革にもなつて、来年度から文学部内での位置づけが多少変わる事になった。簡単に言えば、これまでは独立した組織という面が比較的強かったのだが、これからは各学科・課程の研究活動をもサポートする文学部付属の研究機関という性格を強くすることになる。もちろんそれは、これまで積み上げてきた独自の活動内容の変更を意味するものではない。むしろ各学科・課程との緊密な連携を図ることによって、いっそう幅広く、また奥深い研究ができるようになるに違いないと考えている。本誌の今後に期待していただきたい。(朝比奈弘治)